"優等生ちゃん"は行動が
把握しやすくて楽だな
防犯魔石があれば安全
とでも思ってたん
だろうなぁ
鳴らせなきゃ
何の意味もねぇのにw
いっつも同じ時間に同じ道を通って
友達と遊んで同じ時間に帰る
こんなの狙ってくれって
言ってるようなもんだ
友達と冒険ごっこしてる時も
攻撃魔法に自信ありげだったしなw
奇襲された時に
慌てて何もできない、
勉強がお得意な優等生ちゃんの
陥りがちな弱点だ

さーて、巡回のエルフに感付かれる前に撤収始めるぞ
ああ
今回の獲物は相当な上モノだぜ
ほら見てみろよこの髪のツヤ
きっと両親からたっぷり愛されて育てられてきたんだろうなぁw
これからは俺たちが両親以上に可愛がってやるからよ
パパもママも大切な友達のことも全部忘れちまうくらいにな……ククク……

「こ、こんな事……やめてください……っ」
「ハァ？何言ってんだw　おい聞いたかお前らw」
「ハハハ！こちとら最近女日照りでよぉ。
お前みたいなガキでも穴がありゃ使いてぇ気分なんだ」
山賊のアジトに連れ去られた少女は鉄の棒柱に縛り付けられるやいなや、
衣服を乱暴に破り捨てられた。
白く滑らかな肌。まだ未発達で幼い乳房が荒い呼吸に合わせて上下に動く。
山賊たちに嘗め回すような視線を向けられ、少女は肌が紅潮していくのを感じていた。

「まぁいいんだぜ？俺たちはよぉ」
「そうだな。お友達の二人に代わりになってもらうのもいいかもなぁ。
今日は森の出口で待ち合わせなんだろ？」
「っ？！……な、なんで……」
男に今日の予定をすべて言い当てられ、思わず言葉が詰まる。
「もしお前が俺を満足させられれば友達は見逃してやる」という悪魔のような条件。
少女は目を逸らして肯定とも否定ともつかない返事を返すのだった。
その様子を見て、男は邪悪な笑みを浮かべる。
それにつられるようにして、少女の恥丘に押し当てられた肉棒がビクンと跳ねた。

「交渉成立っと」
「あ……くううううっ！！」
「ふぅ……っ！さすがギチギチだぜ」
少女からカナリアのような悲鳴が溢れ出した。
少女の汚れを知らない秘所に男の肉棒が無遠慮に割り入る。
男のモノは人並みなサイズではあったが、あっという間に少女の奥まで達し、
久しぶりの膣肉を楽しむかのように脈動を続けた。

「か……はっ！はーーーっ！はーーっ！！」
「ガキにしてはなかなかいい具合だぜ。いや、ガキだからか？w」
「あ…ぁ……そんな……中に入って……」
本来ならば幼い少女の膣が大人の男のモノを受け入れることなど容易ではない。
それにとてつもない激痛を伴うはずである。
しかし箱の中に隠された大量のヒーリングジュエルによって、
この狭い空間において強力な自動回復効果をもたらしていた。
痛みは和らぎ、本来ずたずたになるような傷であっても瞬時に回復する。

「あく……っ……んっ……いやぁ……っ！」
「何が嫌だこの淫乱メスガキ。愛液飛ばしやがってよぉ……クククッ」
「そんな……っ……うそ……っ」
男が容赦のないピストンを開始する。
初めは空気の出入りするような乾いたような音だったが、
そこに次第に水気が混じり始めた。
もちろん少女は箱に隠されたヒーリングジュエルの存在を知らない。
自分の身体が男のモノを受け入れてしまっている。
そのうえ、思ったほどの痛みではない……。
それどころか、自分の内側を擦り抉られるたびに、
未知の感覚――甘い疼きを感じ始めていた。

「私そんな……っ……エッチなんかじゃ……」
「無理やり犯されてるのにこんな愛液垂らして、
お前は間違いなくド淫乱の変態だよ」
「あっ、あっ、はあっ……あうっ……」
あの人に冗談で言っていた「へんたいふしんしゃさん」という言葉。
いくら否定したくても、自分が味わってしまっている快楽。
変態、という言葉が少女の中に重くのしかかった。
それでも、自分の口を突いて出てきてしまう幼い嬌声を止めることはできない。

「あうっ……！はぁっ、はあっ……あああああっ！」
「いいぞ、もっと鳴け！どうせお前の友達も親も、誰も聞いちゃいねぇんだ」
「やっ……ああああっ！ふああっ！！ああああっ！！！」
少女の秘所はすっかりほぐれきっていた。
愛液でベトベトになり、少女の濃密な香りを一帯に漂わせる。
男は慣れた腰つきでかき回すように抽挿を繰り返し、
時折腹部を抉るような角度で集中的に刺激する。
そのたびに、少女の体が弓なりにビクリと跳ねる。

「ふうっ……そろそろ……っ」
「あうっ……あっ……え？」
「中に出してやるからな」
「えっ……う、うそ……いやああっ！やだああっ！！！」
快楽に流されて完全に思考の外に追いやられていた。
むしろ、この結末を想像したくないがゆえに、
無意識下で排除していたのかもしれない。
少女はまだ初潮を迎えてすらいなかったが、
性行為によって子種を注がれるということに
本能的な恐怖を抱かずにはいられなかった。

「あああああっ！！」
「くっ……ふぅ……っ」
「っ……ぁぁ……うっ……」
男は少女にしこたま強く腰を打ち付け、
その幼い最奥に精子を吐き出した。
腹の奥に熱い液体が注がれ続けるのを感じながら、
自分が取り返しのつかないところまで
汚されてしまったのだと実感する少女。
なおも男の肉棒は少女の中にびゅくびゅくと精子を注ぎ続けた。
勢い余って溢れ出した精液が愛液と混ざりあい、
えも言われぬ臭気を放つ。

「あ……ぁ……出され……ちゃった……」
「あーやっぱ久しぶりの女はたまんねぇな。
ガキでも十分楽しめたわ」
「う……ぁ……」
悪夢としか言いようが無かった。
友達や両親、あの人と過ごす楽しかった日々が浮かんでは消えていく。
自分の荒い呼吸と心臓の早鳴り、
山賊たちのノズのような声が交差する世界で、
少女はただただ呆然と虚空を見つめた。

「おい、へばってんじゃねぇぞ。こっち見ろや」
「ぅ……ぁ」
「どうだ、こいつがさっきまでお前の中に入ってたんだ。
感慨深いだろ？クククッ」
男は濡れぼそる少女の蜜壺から男根を引き抜くと、
まだ隆々と勃起するソレを少女に見せつけた。
赤黒いソレは、少女の膣を味わい足りないとでも言うかのように
時折ビクリと脈動して見せる。
幼い膣穴にはあまりに大きすぎるソレを見つめ、
少女はごくりと喉を鳴らした。
こんなモノがさっきまで私の中に――。

「ふぐっ……ううううっ……」
「おいおい、泣いちまったぜw」
「パパとママに言いつけられちまうなw」
「おー怖い怖いw」
精液と愛液でぐちゃぐちゃになったソレは、
まさしくさっきまで自分を犯していた男のソレである。
まじまじと視界に入れてしまったことで、
急に悲しさと悔しさが込み上げてくる。
今まで親の言いつけを守り、他人に対して悪いこともせず、
ただ真面目に生きてきた。
それなのに、どうして……。

「さてと、俺は満足だわ」
「じゃ次俺な」
「えっ……うそ……そんなっ！話が違う――」
「“俺は”友達は見逃してやる。
ただし、こいつらがどう思ってるかは知らねー」
「そ、そんな……」
選択肢など無かった。
どう約束を取り付けようと、そもそも約束が守られる保証すらない。
さっきのだって、男たちのただの言葉遊びだ。
ただ身体を弄び、反応を見て楽しむ。
どう交渉しようが、結果が変わることなどなかったのである。

その後、少女は10人弱の男たちの肉欲を一身に受け止め続けた。
自分が標的になっている間は友人たちは安全だと。
それに、集合場所に来ないことを不審に思ってギルドに報告してくれるかもしれない――
そうすれば捜索隊が見つけてくれるかも――
僅かな希望を胸に、時間は過ぎていった。

しかし、丸一日以上が経っても、助けに来る者は誰も現れなかった。

「あっ……あ……ぅ」
「おいおい、突っ込まれてもねぇのにイってやがるぜw」
「さすがにヤりすぎたなw　可愛い声で鳴くからつい本気になっちまったぜ」
「あーガキの締まり具合を経験すると普通の女じゃ満足できねぇかも」
「ハハハ！」
思い思いの言葉を口にする山賊たち。
少女の膣口からはとめどなく精液が溢れ、
子宮も膣も精液で満たされていた。
男たちの度重なる凌辱の中で何度も絶頂を繰り返し、
とうとうわずかな衣擦れですら、
今の少女にとってはイくための刺激になり得た。
盛大に潮を吹きながら体を弓ぞりにしならせる少女を眺め、
男たちが野次を飛ばす。

「さてと、そろそろ反応も薄くなってきたし最後のシメいっとくか」
「おう」
「……」
「まぁ壊れても飼ってやるから安心しろよw」
男の内の一人が茂みに分け入って奥へと消えてゆく。
残りの男たちは精液と愛液でベトベトになった少女を眺めながら、
邪悪な笑みを浮かべていた。
そしてやがて、男の一人が戻ってくる。
その手には頑丈な鎖が握られていた。
じゃらり、と重々しい音を立てて、
繋がれた先の巨体が暗闇の中から姿を現す。

「ひっ……」
「お、久しぶりに表情変わったなw」
「ブヒッ……グヒヒッ……」
それはオークだった。
そして、人間ではありえない大きさの陰茎を勃起させ、
少女の腹に這わせている。
まるでそれは「この長さのモノが今から君の中に入るんだよ」
と知らしめているかのようだった。
少女の顔が一瞬で青ざめ硬直する。
こんなものが入ったら腹が破れてしまう――。

「おっ、お願いです！こんなの……こんなの絶対入らない……！」
「ククク……」
「いやあっ！誰か！助けて！！パパぁ！ママぁ！！」
絶叫にも近い少女の悲鳴は森の中に静かに溶け込んでいった。
醜悪なオークはその顔を喜びに歪ませ、
ゆっくりと腰を引いて挿入の準備に入る。
魔物との交尾。
それは人型族としての最後の尊厳すら踏みにじられる、
絶対に許してはならない行為。
少女は最後のその時まで目一杯の懇願を続けた。しかし……

「グヒィ！」
「〜〜〜〜〜〜〜〜ッ！」
「おーw　入るもんだなぁw」
「腹がボコってやがるぜw」
男たちの間からわっと歓声が上がる。
度重なる凌辱と体液により男根を受け入れる許容値は
大きくなっていたが、
それでも少女の幼い穴ではオークの規格外の巨根を
受け入れるにはあまりにも小さすぎた。
先端は子宮を軽々と突き上げ、尚も押し付けられる腰に
陰茎は膣内でうねっていた。
想像を絶する圧迫感が少女の下腹部を襲う。

「まっ……かはっ……お腹ほんとに……
やぶれ……ちゃ……」
「ブヒッ！ブヒッ！！」
「はあっ！あ”っ！！〜〜〜〜っ！！」
喉の奥からキュゥと気の抜けた呼吸音を発し、
少女が口をパクパクさせる。
オークが腰を引いて打ち付けるたびに
少女の腹部が凹んだり持ち上がったり、
それはまるで別の生物を腹に宿しているようだった。

「今までいろんな女を抱かせてきたけど、
今回が一番ヤル気になってねぇかこいつ」
「やっぱオークはエルフと相性が良いんじゃね？知らんけど」
「ハハハ！」
このオークは冒険者の尋問用に、
山賊たちに飼われていたものであった。
高貴な精神で拷問には耐えられても、
魔物との交尾をちらつかされると口を割る者が存在する。
それは一部の者にとっては死より恐ろしい、
尊厳への凌辱である。

「ふ……ぐうっ……ふーーーーっ！ふーーーーっ！！」
「頑張れよーw　死ぬんじゃねぇぞーw」
「ひ……っ！ふうっ……ひっ……も、もう……やめ……」
少女の秘所が限界を超えて押し広げられる。
膣道を縦横無尽に舐り回すオークの陰茎が、
少女のありとあらゆる性感帯に刺激を送り込んだ。
その度に少女はのけ反り体を震わせる。
イくたびに潮を吹いていたが、
それはもはや快楽というよりは生存本能によるものが近かった。
増していく水音に気を良くしたオークがさらに激しく腰を振る。

「グウウッ！」
「は……あ……あああああーーっ！！」
「グヒッ……」
「はーーーっ！はーーっ……はっ……」
突然の射精。
子宮の最奥にオークの新鮮で濃厚な子種が注がれる。
先に注がれた人間の精子は押し出され、
みるみる内に少女の中の白濁はオークのものに
塗り替えられてしまった。
ぱしゃり、と軽い水音を立てて、精子溜まりが足元にできあがる。
その後、明らかに異質な、どろりとした粘着性を持った液体が溢れ始めた。

「まもの……魔物に……なか……に」
「ググゥ……」
「いやぁ……っ」
腹に収まっているオークの陰茎は射精を終えても
なお絶えず脈動を続けていた。
腹部の圧迫感に眉をしかめながらも、
わずかに呼吸を整える少女。
しかしその時、オークの陰茎の根元部分が
わずかに膨らみ始めていることに少女は気づかなかった。

「ピギィィッ！」
「〜〜〜〜〜〜〜？！」
「グヒヒッ！」
「あ……あ……」
ひゅっ、と僅かに呼吸音を漏らし、
少女は突然の腹部の違和感に目を見開いた。
膣口を球根のような陰茎が塞ぎ密着度を増した結果、
その先に待っていたオークの“本当の射精”は
少女の子宮を妊娠に似たような状態にまで膨張させるに十分であった。
それでも膨張の限界で入りきらなかった分の濃厚な精子が、
少女の股間から溢れ出る。
オークの精子は「ぼとり」と異質な音を立て、
地面になだらかな丘を作った。
オークは満足そうな表情を浮かべ、目の前の幼いエルフの少女を
まるで家畜のように見下ろすのであった。

「おーおーw　妊婦みてぇになってんじゃん」
「これで立派なママの仲間入りだぞw」
「あ……ぅ……魔物の……ママ……や……ぁっ」
もちろん少女が妊娠したということはない。
しかし、オークの精子に込められた魔力は
呪いとして少女のカラダに刻み込まれる。
やがて少女が初潮を迎えた時、卵子はオークの残した魔力に犯され
魔物の仔として生を為すのである。
少女がさらなる絶望に陥るのは、この数年後のことであった――。